
ぜろ・わん・ありす！～幼女が我が家にやってきた～

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ・わん・ありす！～幼女が我が家にやってきた～

【Zコード】

Z9979Y

【作者名】

白城海

【あらすじ】

「わたしの名前は昂谷ありす。何のめんしきもない赤のたにんだ！」

「お前は赤の他人にメラゾーマを唱えるのかよ」

「あれは余のメラだ」

「大魔王気取り！？」

突如神名零一の前に現れた幼女、昂谷ありす。
彼女の目的はただ一つ。

零一と淫行する事！

カモンアグネス！やつぱり来ないで。
サモンアグネス！だから来ないで！

自称『何のへんてつもないただの幼女』、ありす。
だが、彼女の行動はつねに規格外。空を飛び、炎を放ち、フリー
ダムに暴れ回る。

大魔王より傲慢な幼女と、普通を夢見る青年のミサイルより爆発
力のあるイカれた日常を描く『全てのロリコンを打ち碎く』ラブコ
メディ！

1・男と幼女とメラソーマ

「そここの男、ちょっとつきあいなさいー！」

一月の寒空の下、繁華街の路地裏を歩く神名零一は、突然何者かに声をかけられた。

声 それも、幼い女の声。舌足らずで甘く、それでいて、凜とした強さを持つた声。

薄汚い路地裏に、その音色は場違いに色を帯びて響いた。後ろを振り向き、確認する。目に入ったのは少女。しかも、とびきりの美少女が零一を指差し、街灯の上に立っていた。

背丈は零一の胸程度。硝子のように透き通った白い肌。小さめの顔に不釣合いな、勝気で大きな瞳。

人形のようにきつちりと切り揃えられた、ふわふわの黒髪。その背中の下まで伸びた髪の毛が風に煽られ、ばさばさと靡いている。だが、端正な顔立ちとは裏腹に彼女の着ているものは何故かブランド物の深い藍色をしたジャージだった。

誰だ。

尋ねようとした瞬間、少女の指先から火花が散る。火花はぱちぱちと音を立て、やがて拳大の大きさの火球へと姿を変えていく。危険を感じ、身を引く。同時に、少女の指から放たれる火球。火球まるで弾丸のようなスピードで火球は零一のそばをかすめていった。

かすめた火球はそのまま地面に激突。

直後、火柱が立ち、地面が沸騰。炎が消えた後に残つたのは、え

ぐれ、土と石が剥き出しになつた地面だつた。

運よく避ける事が出来たが、当たつていればただでは済まなかつたろう。非難の声を上げようとする零一をよそに、少女が街灯から飛び降りる。

怪我では済まない高さ。惨事を想像する零一。だが、予想に反し少女は重力に逆らうかのようにふわりと着地。そのまま言葉を放つ。

「ふつ。それでこそわたしの見込んだ男！わたしの話を聞く権利を」とえよつ

明るく、元気な。そして無邪氣で、嬉しそうな声。

天使の歌声のような、悪魔の誘惑のような、美しい声。

騙されてはいけない。少なくともこの少女は天使ではない。天使は突然見知らぬ男に闇討ちなどしない。天使は火球も放たない、多分。

「その前に、だ。そもそもお前は何者だよ」

人間、あまりにも異常な事態に遭遇すれば逆に冷静になる。

零一の問いに対し、にやり、と少女が不敵な笑みを浮かべ、答える。

「わたしの名前は昂谷ありす。全くめんしきのない赤のたにんだ」

マジで誰だ。

喉元まで出掛けた言葉を飲み込む。冷静にならなければならぬ。

い。

「お前は全く面識の無い赤の他人にメラゾーマを唱えるのか」

「これは日本だ。現代日本だ。ファンタジーではない。漫画でもない。

「だいじょ「ひふだ」

何がだよ。

今のは喉ではなく舌まで出て來た。危ない。

「あれは余のメラだ」

「大魔王かお前はつ！そもそも魔法が使えるのがおかしいんだよー..」
今のは喉ではなく、実際に口に出してしまった。

「世の中にはたくさん不思議なことがあるのだ」

「不思議なのはお前だ！」

何故か丶サインをしている少女　　ありすに向かつて叫ぶ。そう
考へても不思議なことで済ませていい現象ではない。

「何の用だよ」

氣を取り直し、再び質問。

路地裏で一般市民に襲いかかつて來たのだ。愛の告白やナンパで
ない事は明白。一体どんな理由があると言つのだろう。
だが、少女の返答は零一の想像を遥かに超えた言葉。いや、誰も
想像できない言葉だった。

「一日惚れした！いんこつがしたい！わたしの　ちつあなに　おま
えの　だんこんを　ねじこんでくれ！」

「何でだよつ。何で一日惚れからいきなり淫行になるんだ！おかし
いだろ！意味わからんねえよ！色んなプロセスを飛ばしそぎだつ。月
から地球くらいまですつ飛ばしてるじやねえかつ！」
気づけば、叫んでいた。

ひとしきり言いたいことを言い切り、残つたのはどうこうわけか、
いくばくかの満足感。

「そう。これが、彼がツツ「リリ」で覚めたしゅんかんなのだつた

「田覚めて無い。勝手に変な解説を入れるなー。」

「これが、運命の出会い。

神名零一と、昂谷ありす。二人の馴れ初めである。

1・男と幼女とメラソーマ（後書き）

カモンアグネス。カモンロリコン。
もう一本のシリーズも宜しくお願いします。

2・幼女は男の事を考えると病んじゃうからコレテレなのです

とにかく零一は移動する事にした。ここは汚く、臭い。買い物の近道に利用していただけなのだ。

話を聞かずには逃げる、という手もあったが、後ろから火球で撃たれた果てに火事でも起こされたら困る。

事実、昂谷ありすは、何をしでかすか分からない。

平日の昼下がり、大通りを一人で並んで歩く。しばしの無言の時間。先に口を開いたのはありすだつた。

「こうやって二人で並んで歩いていると、恋人同士のようだ」

零一の返事は、無言。不機嫌なのではなく、無視でもなく、ビックリ。口んごんでいいのか分からぬから。

「しかし、小学生とつきあうのはまずいだろ？」

天使のような声で危険な発言をするあります。

その言葉を聞き、ようやく零一は口を開いた。

「その辺に気を使う常識は持ち合わせてるんだな」

平日の昼間から小学生と歩いている男は間違いなく職質対象。おそらく、彼女なりに気を使っているのだろう。

「でもだいじょうぶだ」

ご機嫌な笑顔を零一に向けありますは続ける。

「わたしはどう見ても小学生。だけど…」

「だけど? 実は幼く見えるだけで十八禁バリバリOKの合法ロリだとでも?」

「実は九才の現役バリバリのロリつ娘なのだ!」

駄目だろそれ。

「深く、深く、嘆息する。続けて、思い切り息を吸い込み、怒鳴る。

「世間に媚びない姿勢は好感が持てるが、それじゃあ色々なモノに引っ掛かるだろうが！」

根本的な解決になつていなか。零一が職質されるリスクは欠片も下がつていない。

「俺は口コソンじゃ無い。好きだの何だの言われても困る。諦めろ」

「じ…じゃあ、頼みがあるんだ。手を…つないでほしい」
すつ、と右手を差し出すあります。

「手…くら…なら、構わないけどよ」

差し出された手を握り返さうとしながら答える零一。その瞬間。

「スキあり！」

白銀の閃きが零一に襲い掛かる。閃きの正体は包丁。ありますが包丁を零一の心臓目掛けて突き刺してきたのだ。

最初からおかしな話だと思っていた。零一に小学生が告白していく。常識的に考えてありえないではないか。

真新しく、人を殺すのに十分な鋭さを持った包丁は零一のコートを突き破り、皮膚に達し　なかつた。

手の長さが足りないのだ。零一が指をぽきぽきと鳴らし、詰め寄る。

「覚悟は出来てるんだろうなア？」

「わたしのモノにならないなら、滅ぼすまでっ！」
相変わらずの元気さで白状する。

「滅ぼすつて何様だよ！本氣でタチ悪いなお前

気付けば零一は、完全にあつすのペースに巻き込まれていた。

2・幼女は男の事を考へる以前はじめてひこやかでいたのである（後書き）

ヤンキー？

3・幼女だつてメアド交換がしたい！

歩きながら追い払おうとしたが、零一の言葉を聞いているのかいないのか、ありすは延々と彼に付きまとってきた。

相手することに疲れ果てた彼は手近なカフエに入る。

大人の多い場所には入り辛い、と言つ子供の気持ちを逆手にとった方法だ。

「カフエだ、カフエだ。恋人と言えばやつぱり『ハーフ』だと思うんだ」

堂々と入ってきた。

「お前小学生だろ。学校はいいのかよ」

今日は平日。その上昼下がり。学生は学校に行っている時間だ。もちろん警察官や補導員に見つかればただでは済まないだろう。

「だいじょうぶだ」

ありすは、はつきりきつぱりと言い切った。どうしてこの少女は常に楽しそうなのだ。

「わたしは、とくべつだからなー！」

「特別？漫画やドラマで見かける【飛び級で大学まで既に卒業している天才少女】とかか」

ならば納得だ。警官に何か言われても逃れられるだろう。

「わたしはこの世でゆいつの、自分で学校を休んでもいいと決める事の出来る小学生なのだ」

「ただのサボリじゃねえか。ひとつと学校に行けよー。」

席に座りながら堂々とサボタージュ宣言をするありすに向かい怒鳴る。余りの大声に、店内は一瞬の静寂に包まれ、

「申し訳ございません。他のお客様の迷惑になりますので、少し小さい声でお願いします」

従業員に文句を言われる。

そこはかとなく理不尽なものを感じつつ零一はアールグレイを注文。ありすはクリームソーダを頼んだ。従業員が去った後、ありすが問う。

「おまえだって、こんな平日の昼間からふらふらしてるじゃないかもつともだ。普通は平日に休みでもない人間はろくな奴ではない。「お前、じゃない。神名だ。神名零一。俺は今日が休みなんだよ」名乗つて、後悔する。零一はありすと仲良くなりたい訳ではない。追い払いたいのだ。

名乗ると言う行為は一人の仲が進展した事と勘違いさせてしまうのではないか。

「そうか。れーいちか。だがだいじょうぶだ。れーいちが無職のかいしょななしの童貞でも、わたしはかまわないぞ。わたしはれーいちのおくさんだからな」

「人の話を聞けよ！後、童貞は関係ないだろ！？」

勘違い以前に既に嫁気取りだった。しかも名前で呼んできた。さらにはりすは続ける。

「だいじょうぶだ。わたしがやしなうし、童貞ももうう」

「どこも大丈夫じゃねえつ。どうやつて小学生が働くんだよ！」

行為も言動も全てが規格外すぎるありすに、常識的な疑問をぶつける。

どんな非常識な回答が来ようと毅然と跳ね除ける覚悟を決める

零一。
だが

「こんなに誰かの事が気になつたのは初めてなんだ。愛していると言つてもいい。好きなためには、どんなことでも、何でもして

あげたい。それは当たり前の感情だろう?」

絶句。年端もいかない少女が無償の愛を語った事に。

愛と言つ神名零一からもつとも遠い言葉を耳にした事に。常識的な言葉を余りにも非常識な人間が口にした事に。

零一が言葉を失っている間に、注文した飲み物が到着。気持ちを落ち着かせるために、煎れたてのアールグレイを口にする。店員は諦めたのか、大声で騒ぐ一人には何も言わなかつた。

たつぱりと間を開け、零一が言い放つ。冷たく、無機質に。

「俺はこんなに人の話を聞かない奴は初めてだ。帰れ」

完全な拒否。全てを拒絶する壁を零一は言葉と態度で作り出した。その壁に気づき、ありすは少し悲しそうな瞳で、言つ。

「れーいちは、迷惑か?」

「俺じゃ無くても、迷惑だ」

壁は作つた。後は、ありすの言葉に耳を傾けず全て無視するだけでいい。

彼女が何を言おうと関係ない。零一が作りだした心の壁は、何者にも破壊されたことがない。

彼はそうやつて生きてきた。何者にも心を開かず、何者にも興味を示さず。

しばしの沈黙の後、ありすが口を開く。零一が想像もしない言葉と共に。

「そうだな。とつぜんわたしのような美少女に言い寄られて困らない人間などいまい」

「そうじゃないからな! ? 論点が次元を超えたレベルでズレてるんだよ!」

全てを拒絶する壁は、あっさりと次元ごと崩壊した。

「確かに、わたしも突然すぎると思つんだ」

「よつやく常識に目覚めたか。諦めろ」

零一は十八歳。ありすは九歳。家族でもない二人が一緒に居て良い理由がない。

「仕方がない。今日はメアドと、ケータイ番号と、住所と、婚姻届だけがまんしてやる」

「何でそななるんだよつ。何様だよ、お前！」

絶対に連絡先は言わない。とも付け加える。

「ならば、大声でけいさつをよぶぞ」

「アレだけやりたい放題しておいて最後は警察頼みで脅迫だよ！面倒臭え。マジで面倒臭えつ」

灼けるように熱いアールグレイをやけくそ気味に一気にあおる。この少女に言葉は通じない。そう結論付け、無視して帰ろうとした零一にありますは告げる。

「わたしだけが、よつをやうするのもおかしいと思つ。れーいちは、何か希望は無いのか」

「俺の希望は一つ。【放つておいてほしい】ただそれだけだ」

そう答え、立ち上がる。話は終わりだ。

「わたしと結ばれれば、れーいちにも良い事があるぞ」

「良い事？どうせ口クでもない事だろうが、最後に聞くだけ聞いてやるよ」

「わたしのはんりょとなれば、淫行し放題！わたしもれーいちを手に入れられて、みんなしあわせ！」

「俺は淫行とか要らねえよ！その時点で間違ってるからな！？」

夢見る少女の瞳。しかし発せられた言葉は淫行。想像以上に口クでも無かつた。

「じゃあ、どうすればいいのだ」

「どうせこうも無い。帰れ。帰つてくれ。頼むから」
もはや涙目で立ち去りつとする零一。そして彼を引き留めようと
声をかけるあります。

「どうしても、だめなのか?」

「どうしても駄目だ。俺は警察に捕まりたくなんか無い」
そう伝え、零一は伝票を摘要、レジへと歩き出す。

「仕方がない。さいこのしゅだんだ」

「…最後の、手段、だと」

嫌な予感がする。違う、嫌な予感しかしない。

「たいへんだ。たいへんなロリ口 むぐつ」

危険な発言をする前にアリスの口を手でふさぐ。

一人の距離は数メートル程離れていたはずだったが、零一があり
すに近づいた姿を認めたものは皆無だった。まさに神速、まさ
に神業。

「わかった! メアドだけなら交換してやる。だから黙れ、黙れ。な
?」

もしかしたら俺はこの少女から逃げられないのかもしね。と、
本気で不安になる零一。

もちろん、彼の不安は的中する。

それも、常識を超えた形で。

3・幼女だつてメアド交換がしたい！（後書き）

眞面目に幼女萌えを田舎していきます。

4・ストーカー？幼女がやるから法的にも犯罪じゃないんです

零一はありすとメールアドレスの交換をした瞬間、獸のよつな速さで逃げだした。

追いつかれないよういくつもの路地を駆け、潜り抜け、そこでようやく足を止め一息。

そのまま駅に向かい、不必要なまでに電車を乗り換え自宅近くの最寄り駅に到着。

全では昂谷ありすの追尾を逃れるためだ。怖いので携帯電話の着信などは確認していない。

苦労の果てに零一が自宅の前にたどり着いた時には、既に日が暮れていた。

木造平屋。築二十年の一戸建て。生まれた時から住んでいる家。一人で暮らすには広すぎる空間。だが、五年も一人で使っていれば慣れてもくる。

玄関の力ギをかけ、真っすぐ自室へ向かう。
今日は疲れ果てた。もう何も考えたくない。

「何だったんだよ。さつきのガキは。何年か経てばとんでもない美女になるだろうが、小学生は無いな」

小学生以前に人間かどうかすら怪しい。

人の魂を啜り、肉を食らって生きていると言われても信じてしまいそうだ。

魔法を操り、傍若無人。育てた親の顔が見てみたい。

「今日はもう疲れた。寝よう」

着替えもせずに、そのままベッドに潜り込もうと布団をめぐる。

「添い寝なら任せろー！」

なんかいた。

無言でめくった布団を元に戻す。何も見なかつた事にしたい。
見なかつた事にすれば無かつた事に出来るに違いない。

「疲れてるんだな。疲れてるから幻覚を見るんだ」

もう一度、布団をめくる。

「疲れてるのなら、せむり添い寝だな。いい夢が見れるだ。つい
でに淫行もしよう」

やっぱり何かいた。

全てを諦めて、【何か】を【何か】と認識する。
そう。

ありすは全裸だった。

慌てて田を逸らし、零一が叫ぶ。

「どうやって入って来たんだよ！」

メールアドレスしか教えていないはずだ。尾行も撒いたはずだ。
鍵もかかっていたはずだ。

なのに、何故彼女はここにいる。

「金と、こねと、メアドと、名前があれば、住所をさげる」となど、
ぞつさもない

「何でそんな自慢氣なんだよ。全てにおいてお前の実力と関係無え
だらうが！」

「そんな事はどうでもいい。今、ここは一人の愛の巣。ところが
どう愛しあおつ。まあ」「
のそのそと布団からぬに出でてくる。飛び出してこなーのは寒いか
らだ。間違いなく。

「や、やめろ。近づくな」

「断る」

零一の拒绝をありすは許さない。小さく、華奢な体からは想像で
きないほど凄まじい腕力で布団に引きずり込まれる。

「！」声を出すぞ

腕を零一の首に絡め、唇を奪おうとしてくるありすに警告する。
顔が近い。近すぎる。

あと数センチ近づくだけで唇は触れあうだらう。

「出してもかまわない。だが、たいはされるのはれーいちだ」

零一の家に全裸の小学生がいる。警察が見たらどう思うだらう。
想像したくもない。

そんな想像よりどうやつたらこの状況を切り抜けられるかを必死
に考えるべきた。相手は子供、変人、全裸。

全裸。そうだ。全裸だ。

零一は、キスをしようとも力を緩めたありすを振り払い、窓に向か
う。そのまま窓を一気に全開へ。吹きこむのは一月の冷たい風。

「ひあっ」

その寒さにたまらず布団の中で丸まるありす。勝った。心の中で
ガツツポーズ。

「話し合おう。まずはそこからだ」

力ずくでの《説得》は無理。能力では勝ち目が無い。話術だ。
交渉で落とし所を見つけて、今日は帰す。

その後の事は明日起きてから考えればいい。今を乗り切る事が最も大事だ。

「そんなにあせって。わたしのみせいじゅくなカラダにこいつぶんしたのか？」

布団から頭だけを出してありますか言つ。まずい、話がかみ合つてない。日本語が通じていない。通じる気がしない。
交渉になるかどうかすら怪しい。だが、零一は折れそうになる心を必至で奮い立せ言い返す。

「違えよ。塀の向こうに行きたくないだけだよ！分かれよ。分かってくれよ」

この齢で前科を負いたくない。必死の願い。もしかしたら涙を流していたかもしれない。人間は自分の限界を超えると悲しくも無いのに涙が出るのだな、と場違いな事を考える。

「とにかく、今後の事を話し合おう。まずは服を着るんだ」「今後の、事？」

何を想像したのか、ありますは満面の笑みを浮かべ、再び布団にもぐりこむ。三十秒ほど「じんじん」とした後、

「着たぞ。まずは結納の話からだな」

と言いながら布団から姿を現す。先程のジャージ姿だ。

これで交渉が再開できる。零一はそう思つていた。思つていたのだが。

体が勝手に動いた。勢いをつけ、零一はあります的手を取る。

「何をする。そんな強引な。はずかしいぞ」

顔を赤くするありすの腕を掴み、抱え、そのまま全開の窓から投げ捨てる。

「な……きさま。はかつたな……はかつたなあああああ……」

ドップラー効果を残しながら夜空の彼方へ消えていくありす。彼女の事なので死にはしないだろう。

星になつたのを確認した後、窓を閉め、施錠する。

当初の予定通りといかなかつたが、危機は去つた。

逆上したありすが零一の家に放火することも考えられたが、その時はその時。

潔く死のう。

ロリコンのレッテルを張られ社会的に抹殺されるよりは、実際に死んだ方が多少はマシだ。

そう、零一は勝ったのだ！解放されたのだ！

4・ストーカー？幼女がやるから法的にも犯罪じゃないんです（後書き）

良い子のみんな。0・1・あつすは『全年齢向け』だよー。
来いやアグネス！やつぱり来ないで！

あと、メインで書いている『記憶探偵』もどうぞよろしく。

5・締め出されたらこの方法で家に入れる（前書き）

門限破りで家から追い出された時のための対策・実用編

5・締め出されたらこの方法で家に入りつ

ありすの追放に成功した後、零一が最初にやつた事は戸締りだつた。

玄関にチエーンをかけ、両戸も釘と金槌で完全に塞ぐ。誰も入つて来ることが出来ないよう。全ての作業が終わつたのは、深夜にも近い時間帯だつた。

肩で息をしつつ、自室に戻る。早く眠りたい。汗だくではあるが、シャワーを浴びることすら拒否したいほどの疲労。ベッドに潜り込もうと、布団をめくる。

「そんなに照れなくていいのに。ここには、わたしたちしかいないのだから」

また何かいた。また何かが喋つた。ホラー映画だ。零一が叫ぶ。

「どこから沸いてきやがつたああああ！」

これではまるで幽霊かボウフラではないか。少なくとも人間ではない。施錠され、窓のふさがれた住宅に何の痕跡も残さず侵入できる人間など存在しないはずだ。

「かんたんなことだ。種明かしをしよう」

人差し指を立て、いつもの邪氣の無い笑顔でありすが言つた。どうやら何らかのトリックがあるようだ。

「聞くだけ聞いてやる」

聞いたらその手段を塞いでやる、と心の中で付け加える。

「れーいちの家は、【木造平屋】で【一人ぐらし】だね?」

「ああ。親が海外赴任だからな」

事実、である。零一の両親は中学生になつたばかりの零一を一人残し、海外へ旅立つた。

生活費は振り込まれてるので生きてはいるだろ?。だが、連絡は取つていない。とり方すら知らない。

思考が脇道にそれた零一をよそに、ありすが言葉を続ける。

「そこに、【穴】がある」

「穴? セキュリティホールって奴か」

思考を本筋に戻し、答え、考える。木造平屋に一人暮らしでいる事にどんな穴があるのだろう。

想像を巡らすが何も思い浮かばなかつた。思案顔の零一に向かつてありすが続ける。

「その【穴】をりょうし、わたしの部屋からワープホールを」「待て」

何かおかしい単語を拾つた気がする。気のせいか。

「今、何て言った」

「わたしの部屋から、れーいちの部屋にちゅくつつの、ワープホールを作つた」

氣のせいではなかつた。

「何で平屋戸建てのセキュリティホールからワープホールを作るつていう発想になるんだよ? おかしいだろ!」

確かに目を凝らしてみると、開いたクローゼットの中の空間が歪んでいる。クローゼットに入つていた衣類はどうなつたのだろうか。嫌な想像しか浮かばない。そしてワープホールだかセキュリティホールをふさぐ方法も浮かばない。

「ともかく、これでいつでも夜ばいかけほうだいだ！良かつたな、
れーいち」

「ちつとも良くねえ。閉じる。今閉じろ。いや、帰れ、閉じる前に
帰れ。帰つてから閉じろ」

一気につくしてたる。もつ限界だ。色々なものが既に限界だった。

「いひなつたら親御さんに直接回収してもらう。穩便に済ませてや
らうとしたがもう知らん。手段は選ばんぞ」

ワープホールから直接ありすの家に侵入し、彼女の両親と直談判
する。それしかない。ありすが通り抜けてきたのだから、零一も通
れるはず。

「つて、通れるわけ無えよ！なんだよワープホールって。そんなモ
ノに飛び込む覚悟があつたらこんな事になつて無えよ！」

「どうしたのだ。急に一人でしゃべりだして。まさか、とうとう云
説の【セルフツッハ】^{ハヤ}に覚醒めたのかつ？」

「覚醒めて無え。なんだよ【覚醒めた】って。能力バトル漫画か！
ツッコミは能力じや無えよ！」

「しかし、りょうしんのことなら、だいじょぶだ」

零一が頭を抱え喚き散らす中、ありすは言つ。《だいじょうぶだ
》が口癖なのだろうか。

「すでに、りょうしんことくんの仲だからな」

凄いだろう。と、ふんぞり返つてゐるありす。頭痛に襲われる零
一。

「自由すぎるだろ！どれだけ放任主義なんだよ。それになあ、小学
生のガキが見知らぬ男の家に外泊だなんて、駄目だろ？？」

深まる頭痛の中、理性を保ち、必死に、そしてできるだけ優しく
諭す。

「だいじょぶだ。この家は、すでに家具も、土地もばいしゅうし

てある。今はわたしの家だ」

懐から書類の束を取り出すあります。権利書だ。それも本物。零一の両親の実印もある。

「『ど』も大丈夫じゃねえつ。どれだけ権力を持つてるんだよ！常識的に考えておかしいだろ！？」

「…ても」

襲い来る頭痛を吹き飛ばすために、零一はただ叫ぶしかなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9979y/>

ぜろ・わん・ありす！～幼女が我が家にやってきた～

2011年12月1日19時53分発行